古都好日 ©

北条秀司 著

昭和39年10月14日　初版発行
昭和44年 3 月 5 日　再版発行　　¥ 500

発行者　納屋嘉治

検印

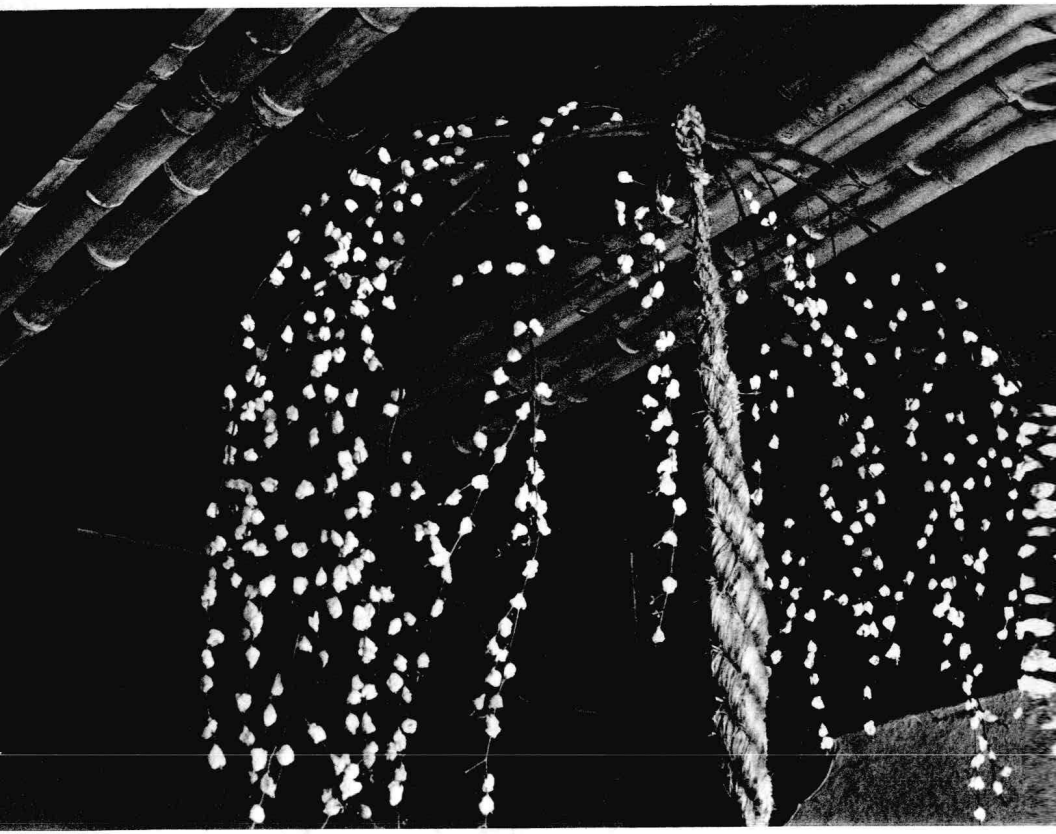
発行所　株式会社 淡交社
本社　京都市北区堀川通鞍馬口上ル
支社　東京都千代田区麹町4ノ5
第7麹町ビル　振替京都4578

活版印刷　内外印刷株式会社
グラビヤ印刷　日本写真印刷株式会社
製本　大日本製本紙工株式会社

春

祇園さんの蘇民蒔来のお守り

餅花



古都好日·目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一月　おけら火　にらみ鯛　枯野……8
二月　雪催い　鴨なべ　京の大仏っあん……26
三月　比良の八荒　夜啼きうどん　青貝の間……42
四月　花かんざし　十三詣り　女狐……56
五月　若葉曇り　あぶり餅　糺の森……72
六月　青い雨　愛宕雷　ほととぎす……94
七月　朝がゆ　宵山　五位の少将……112

八月
幽霊餅　送り火　地蔵盆……128
九月
落し文　鉄鉢料理　雨月……148
十月
夜店の灯　古電車　牛祭……166
十一月
丹波栗　比叡颪し　丑の刻詣り……180
十二月
ゆく年　雪の客　高瀬川……198
あとがき……219

古

都

好

日

一月

おけら火　にらみ鯛　枯野

去年も一昨年も、わたしは京都で年の夜をおくることができた。そして、寺でらの除夜の鐘を聴くことができた。と書くと初うそになる。一昨年は成功したが、去年は失敗した。

去年は暮から新春(はる)にかけて少し仕事があったので、都ホテルにたのんで、南禅寺の方に向いた部屋を取ってもらった。ひどく豪華な部屋で、国賓に使用されるらしく、それだけが空いていた。

ともかくも今夜だけは、ここで寝てください。明日はいつものお好きな古びた部屋をなんとかしますと言われ、国賓殿下になったつもりで、ゆったりと、ブランデーなどをなめながら、刻を待ち、刻が来たのでヴェランダの椅子に出てみると、たちまち入って来た騒音は、眼の下の蹴上(けあげ)道(みち)を行き交う自動車の、絶え間ないクラクションの騒音だった。

南禅寺山はすぐ眼の前なのだが、いっこうに鐘の音はきこえて来ない。部屋にはいってラジオをひねってみると、もう除夜中継がはじまっている。もう一度ヴェランダに出て、注意深く耳を澄ましてみたが、なんとなく鐘らしきものがきこえてはいるようだ。その程度のはかなさである。あきらめて部屋にはいり、ラジオの鐘を聴くことにした。やがて南禅寺の鐘が、わざわざ遠い放送塔を経て、わたしの耳にとどいて来た。

しみじみと前の年の夜が思い出された。前の年は岡崎の平安閣に年の夜をおくった。さすがにわたしのほかは泊り客がなく、古い建物の方の二階の縁で、ヒッソリカンと刻を待っていると、やがて暗い林泉の向こうから、まず南禅寺の鐘がきこえはじめた。

すぐに北の方角からもきこえ出した。

つづいてまた西の方向からも。

おもしろいほど鐘の音がふえて来る。高く、低く、遠く、近く……。幽玄をきわめた大音楽がぐんぐんもり上がって、なんの雑音もない。漆黒の空間を玉のような妙音が縦横に交歓される。

眼をほそめ、恍惚と聴きほれているそばで、年配の仲居さんが、あれは知恩院さん、こっちゃからのンは黒谷さん、いま鳴ってるのンは法然さんと、知人みたいに呼びながらひとつひとつ指さすようにおしえてくれる。その京言葉もうつくしかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

仲居さんは

「これから髪結さんとこぃ行き、その足で古門前の自家ぃ寄って、子供達のお雑煮をたいて来てやるのどす」

と、うれしそうに言った。……

ホテルの除夜に失敗したわたしは、もう一度真夜中の戸外へ出る気になった。こういうときホテル泊りは都合がいい。

まっ暗な粟田口道を真葛ガ原の方へ、ゆっくりとあるいた。もう昭和三十七年である。

低く霧がはい、わりとあたたかい。青蓮院の門には年越えの夜も桐の紋の提灯が二つ、ひっそりと夜を守っている。一年三百六十五夜、この灯は、モータープールと消えた庚申堂にかわって、旅びとの心をあたためてくれている。

知恩院の山門が東山を背後に、うっすらと闇に浮き出ている。ほど遠からぬ八坂神社の白朮火が霧を透して反映しているのだ。百八煩悩の鐘をつつがなく打ちおえた伽藍は、山門の上に深く静まり返っている。

山門下の広場は、いまは観光バスの溜り場となり果てたが、夜の霧がそれを清掃して、むかしのゆめを溶かしていてくれる。広場の中央には大きな灯籠が一基デンと座っていた。その、座石

が手ごろの椅子になり、山門を仰ぎ見るための、わたしの特等席だった。

年わかいころ、三年つづけてわたしはその座で、知恩院の除夜を聴いたことがある。はじめの年は年上の女の人とならんで聴いた。二年目は、その人はかなり遅れてやって来た。三年目は来なかった。その後の消息はわからない。灯籠もどこかへ行ってしまった。南門をくぐって、いもぼう料理の平野家の前から、円山公園にはいると、もうおけら詣りのざわめきが遠く潮騒(しおさい)のようにきこえている。クルクルとたのしげに火なわを回して来る若夫婦とすれちがった。

祇園さんという愛称で呼ばれる八坂神社のおけら詣りは、除夜の鐘が鳴りおわるころから、急に人足がふえて来る。一年の帳〆をおわった商家の人びとが、河原町や室町から、遠くは西陣、千本の町まちからも神火をうけに集まって来る。そのための火なわを売る男女が、楼門から社殿にかけて、目白押しに客を呼んでいる。

「吉兆なわ。吉兆なわ」

「火なわ買うとくれやす」

「安ウまかった。二本で百円や」

昔はその喧声が四条大橋の辺から、両側につづいたという。

本殿では初空が白むまで、あまたの儀式がつぎつぎとつづく。その楽の音と巫女(みこ)が振る鈴の音

をうしろに、白衣の神官が燃えさかるかがりびの火をなわにうつしてくれる。かがりびには深山に採取されたおけらと呼ぶ吉兆草が神檜とともに燃され、その浄火を持ち帰って台所のかまどにうつし、お雑煮をたくと、向こう一年の疫気を祓うと言われている。

その火を大切に守って行くためには、たえずクルクルとなわの火先を回転させて行かねばならない。その弧を描く火が列をなして社門を出て行くのがすごくうつくしい。下河原の小暗い町筋などで見ると、さらにその火が生きてくる。このあたり一帯が真葛ガ原と呼ばれていたころから、京の町びとはいとしく神火をふりふり家路をたどったのであろう。

国賓部屋の朝の眺めは、しかし、すばらしかった。重いカーテンを引くといっしょに、思わず眼を見はった。

まっ青に晴れわたった初空の下に、まず平安神宮の大鳥居の朱が眼を射た。その上に、鷹ガ峯、左大文字山、衣笠山などの近い山が、大和絵のようなまろやかな線を描いている。

西につづく双ガ丘も、小倉山も、嵐山も、初日の中におだやかなたたずまいを見せ、その背後に高くそびえ立つ愛宕山には、去年降ったままの雪がまだらに光っている。

東は、眼の下の南禅寺山から若王子山、善気山にかけての赤松山が、ところどころ竹やぶの寂

び色をまじえて如意ガ岳につづき、山波の果てには、都の鬼門をまもる大比叡が厳然として稜角の雪をかがやかせている。ほんとうにこんな元朝もめずらしい。山にかこまれた盆地特有の水蒸気がどこにも立ちこめず、眼を放てば、鞍馬の奥遠く、いつもは一色の青に溶けている若狭の山やまが、今日はそのひとつひとつの個性を、ガラス絵のように透明に浮き出している。なんとなく今年は佳き年でありそうな感懐が胸にわいた。

祇園の定宿に行くと、もう年賀の支度ができていた。九十の春を迎えたおばあちゃんが、紋服でわたしを待っていてくれた。

おばあちゃんは毎年暮れが近づくと、正月には来てくれるかどうかをたしかめて来る。おばあちゃんにはわたしとおない年の息子さんがあったが、慶応を出るとまもなく死んだ。その息子さんの祝い膳がまだ蔵の中にあり、それでわたしにお雑煮をたべてもらいたいのだ。

朱塗りのりっぱな男膳へご主人のように座らされた。おばあちゃんとおかみさんは黒塗りの女膳。台所のおばはんは少し小さい奉公人膳。なんの抵抗感もなく、各人がそれぞれの座にやすんじている京の家居である。

床にはおばあちゃんが大きなお茶屋の主人だった日の華奢を想わす栖鳳の軸。その下にはお鏡

餅と並んだ蓬莱の島台。三宝荒神、愛宕明神、秋葉権現、もう一つ、伏見の稲荷、それぞれの神棚に灯心の火が長く立っている。

お屠蘇が出、大福茶が出たところで、あらたまった年賀の挨拶がながながくどくどと、他人行儀に交換される。お母さんへと書いたお年玉の袋を、わたしはおばあちゃんのお膳に置いてやった。

「かなんわ、いつも」

廓言葉で礼を言い、おばあちゃんは幸福そうである。

お屠蘇の盃がひとまわりすると、白味噌のお雑煮椀が来た。大きな頭芋がお椀の大部分を占領して、デンとはいっている。人の頭となるようにという縁起だ。まずそれを食べ、あらためて雑煮餅がよそわれることになる。

「お祝いやす」

コーラスで言って、太い祝ばしをとりあげる。

「さあさあ、お煮〆もたんとたべとくれやっしゃ」

おかみさんがひろげてくれる組重の一つ一つに、ギッシリと正月料理が詰まっている。押詰った暮れの二、三日、台所の布袋さんの下で、忙しそうにゴソゴソ働いていたおばはんの、これが

その発表作品なのだ。

結びこんにやくと高野豆腐と玉子の厚焼を小皿に取ってもらった。フト亡き母をおもった。

組重の横の伊万里の大皿に、青い山草を敷いて、大きな塩鯛が一匹、天窓から射し込む初日影をキラキラと受けている。これが京都の名物にらみ鯛だ。見るだけで、はしをつけることがタブーとされている。

「けっきょくこれは、いつ食べるの」

「骨正月に食べるのどす」

「じゃ、二十日じゃないか。うへぇ」

わたしの表情がおかしいと言って、おかみさんがわらう。

「だいじょうぶどす。粕汁に入れて食べるのどっさかい」

台所のおばはんは平然として言う。

四日はお鏡餅開き、七日は七草粥、十五日の小正月は小豆粥、そして二十日がその粕汁。戦争で焼けなかった京都の町は、依然として古習の中に生きている。

戸外ではもう羽根つきの音がきこえはじめた。万才の鼓の音も花見小路の方できこえている。

「ええお正月えなあ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com